

V 日高振興局

1. みなべ町4Hクラブが県外研修を実施しました

みなべ町4Hクラブ（みなべ梅郷クラブ（中井貴章会長））は、12月5日～7日にかけて福島県・宮城県で研修を行った。

福島県では、当クラブのプロジェクト活動で使用している新素材培地（ポリエステル培地）の栽培事例として、試験栽培している川俣町のアンスリウムについて研修した。このアンスリウム栽培施設は、近畿大学が「オール近大川俣町復興支援プロジェクト」の一環として技術協力するため平成25年に当地区に設置した施設で、試験栽培を担当している高橋佑吉氏に話を伺った。

アンスリウムは、①暑さに強い、②収穫は作業の都合で行える、③葉も出荷できるという長所があり、本年8月に初出荷。ポリエステル培地栽培ではかん水はミスト散水で十分で、気温・水管理含めて全自動であるため栽培管理が楽という特徴を聞いた。次年度以降、川俣町内で栽培が増える予定とのことであった。プロジェクト活動としてポリエステル培地を利用して数品目を試験栽培しているクラブ員にとって、施設内での培地の配置や水管理等が大いに参考になったようで、熱心に質問を行っていた。



アンスリウム栽培施設の様子

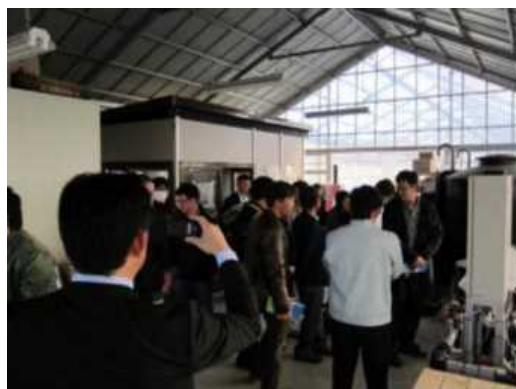
宮城県では、東日本大震災により壊滅的な津波被害を受けたイチゴ産地の復興にむけた取組と東北一のイチゴ産地の現状を参考とするため、亘理町の事業整備された「いちご団地」を見学した。今回、事業整備された「いちご団地」は、町内で3カ所あり、約23haで施設イチゴが栽培されている。

亘理町役場農林水産課農政班の鈴木秀知主事から、平成23年の震災の津波により、人、家とともにイチゴ栽培施設に甚大な被害があったことや、被害の大きさから、離農が進むことを心配し、速やかな生産活動の復興が必要と判断、事業により土地の造成・集約と生産施設建設を行い、平成26年産に間に合わせたことなど、震災からのイチゴ産地復興に向けた苦労話を聞くことができた。その後、事業で建設したイチゴハウスを見学、最新の導入技術、宮城県オリジナルのイチゴ品種の栽培状況について聞いた。

今回の県外研修は、クラブ員自身の新技術研鑽のためだけでなく、被災された農業産地の復興に向けた想いを学ぶ有意義な研修となった。



復興事業「巨理いちご団地造成事業」
で設置したイチゴハウスの様子



イチゴの生育管理スペース